

一 別紙の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

問一 線①「教えさとされている思いがした。」とありますが、どのようなことを教えさとされたと感じたのか、答えなさい。

問二 線②「そういうふうにして」と置きかえられる同じ内容の部分、本文中から三〇字以内でぬき出し、最初と最後の五字を書きなさい。

問三 線③「それを飲んだくれて食いつぶし」とはどういうことを言っているのか、説明しなさい。

問四 線④「わたしたち子どもはカランを恐れていた。」のはなぜか、説明しなさい。

問五 線⑤「犬のくさりをはずすものさえた。」とありますが、何のためにこうしたのか、解答らんにあてはまるように一〇字以内で書きなさい。

問六 A C にあてはまる動詞を次の中から選び、ふさわしい形に直して答えなさい。

- おしのける ・ だきあげる ・ よりかかる ・ くぐりぬける
- たちのく ・ すりぬける ・ かぎまわる ・ たちはだかる

問七 線⑥「あれよあれよと思うまに」に表れている「わたし」の気持ちとして最もふさわしいものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア すばやい行動に感心する気持ち。
- イ 心配したとおりだとくやしがる気持ち。
- ウ 今見ていることをだれかに知らせたい気持ち。
- エ 目の前のできごとにおどろきうろたえる気持ち。

問八 線⑦「カランの思惑」とはどのようなものか、説明しなさい。

問九 I IV にあてはまるものを次のア～エから選び、記号で答えなさい(同じものは二度使えません)。

- ア びっくりしていった
- イ 興奮してささやいた
- ウ あらためてさつき見たことをいつのつた
- エ 叔母さまのスカートをひっぱって、いま見たことを耳打ちしようとした

問十 線⑧「カランはちよつと身をよじつたが、さつさと台所へいって、テーブルについた。」から読み取れるカランの気持ちを説明しなさい。

問十一 線⑨「わたしは嫌悪の気持ちをどうすることもできず」とありますが、「わたし」は何に対して「嫌悪」の気持ちをいだいているのですか。次の1～5について、あてはまるものに○、あてはまらないものに×を書きなさい。

- 1 叔母さまがカランについての「わたし」の話を聞いてくれないこと。
- 2 叔母さまに、ずうずうしいカランがやさしくされていること。
- 3 カランが盗みを働いたことに対して「わたし」が何もできないこと。
- 4 大伯父さまのお金をカランが盗んだこと。
- 5 カランがピチャピチャ音をたてて指をなめたこと。

問十二 線⑩「むとんちやくな」・⑪「あらわに」の意味としてふさわしいものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ⑩
- ア 思い切ったことをする
- イ りくつに合わない
- ウ ものごとを気にかけない
- エ すなおで悪気がない

- ⑪
- ア むき出しにして
- イ あらたにして
- ウ きれいに消して
- エ むりにかくして

問十三 線⑫「どうしてカランはかえしたのかしら?……はつきりわかるようにここへおいていったのかしら、自由に入りに来たのに」について、どうしてカランは「はつきりわかるように」お金を「かえした」のか、一〇〇字以内で説明しなさい。

(裏に続く)

一一 次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

この文章の前で、筆者はインドの一人旅やアラスカでのカヌー下り、北極から南極への旅など多くの体験をしたことについて書いています。

これまでは自分が実際に歩んできた道のりを書いてきました。こうして振り返ってみると、たしかに多くの人が行かないような場所や、体験しえないような行為をしてきたのかもしれない。このような経験によって、ぼくは世間から「冒険家」と呼ばれることもあります。

しかし、辺境の地へ行くことや危険を冒して旅することが、果たして本当の冒険なのでしょうか？ そもそも「冒険」や「旅」には、いったいどんな意味があるのでしょうか？ あることをきっかけに、ぼくはよりいっそうそんなふうを考えるようになりました。

① 観光旅行に行くことと旅に出ることは違います。観光旅行はガイドブックに紹介された場所や多くの人が何度も見聞きした場所を訪ねることです。そこには実際に見たり触れたりする喜びはあるかもしれませんが、あらかじめ知り得ていた情報を大きく逸脱することはありません。一方、旅に出るといのは、未知の場所へ足を踏み入れることです。知っている範囲を超えて、勇気を持って新しい場所へ向かうことです。② それは、肉体的、空間的な意味あいだけではなく、精神的な部分も含まれます。むしろ、精神的な意味あいのほうが強いといってもいいでしょう。

人を好きになることや新しい友だちを作ること、はじめて一人暮らしをしたり、会社を立ち上げたり、いつもと違う道を通って家に帰ることだつて旅の一部だと思ふのです。実際に見知らぬ土地を歩いてみるとわかりますが、旅先では孤独を感じたり、不安や心配がつきまといまふ。旅人は常に少数派で、異邦人で、自分の世界と他者の世界のはざまにあつて、さまざまな状況で問いをつきつけられることになりまふ。多かれ少なかれ、世界中のすべての人は旅をしてきたといえるし、生きることはすなわちそういった冒険の連続ではないでしょうか。

生まれたばかりの子どもにとつて、世界は異質なものに溢れていまふ。もともと知り得ていたものなど何もないので、あるがままの世界が発する声にただ耳を澄ますしかありません。目の前に覆いかぶさってくる光の洪水に身をまかせるしかないのです。そういった意味で、子どもたちは③ 旅人であり冒険者だといえるでしょう。歳をとりながら、さまざまなものとの出会いを繰り返すことによつて、④ 人は世界と親しくなつていきます。やがて、世界の声は消え、光の洪水は無色透明の空気みたいになつて、何も感じなくなつていくのでしょうか。それは決して苦しいことではありませんから、世界との出会いを求めめることもなくなり、異質なものを避けて五感を閉じていくのかもしれない。そして世界がすでに自分の知っている世界になつてしまつたとき、あるがままの a 限の世界は姿を変えて、ひどく小さなものになつてしまいまふ。そのことを b 定するつもりはまつたくありませんし、自分もそうならないとは限りませんが、c 断の冒険によつて最後の最後まで旅を続けようと努力したいとぼくは思ふのです。

現実は何を体験するか、どこに行くかということをはさして重要なことではないのです。心を揺さぶる何かに向かいあつていか、ということがもつとも大切なことだとぼくは思いまふ。だから、人によつては、あえていまここにある現実に踏みとどまりながら大きな旅に出る人もいるでしょうし、ここではない別の場所に身を投げ出すことによつてはじめて旅の実感を得る人もいるでしょう。

⑤ ぼくが冒険家という肩書きに違和感を抱く理由がわかつていただけただけでしやうか。

石川直樹『いま生きていくという冒険』

問一 — 線①「観光旅行に行くことと旅に出ることは違います。」とありますが、「旅に出ること」は「観光旅行に行くこと」とどこが違うのですか。違う点を二〇字以内で答えなさい。

問二 — 線②「それは、肉体的、空間的な意味あいだけではなく……精神的な意味あいのほうが強いといつてもいいでしょう。」と言つている筆者が、旅で最も重視しているのはどういうことですか。それを表している一文を本文全体から探し、はじめの五字を答えなさい。

問三 — ③に最もふさわしいことばを次のア～エから選び、記号で答えなさい。  
ア 永遠の イ 究極の ウ 未熟な エ 勇敢な

問四 — 線④「人は世界と親しくなつていきます。」とありますが、  
(1) 「世界と親しくなる」とはどういうことか、答えなさい。  
(2) 「世界と親しくなつていく」ことについて、筆者はどのように思つていのか、説明しなさい。

問五 — a cには、すべて下の字の意味を打ち消す漢字が入ります。それぞれにあてはまるものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。  
ア 不 イ 未 ウ 無 エ 非 オ 否

問六 — 線⑤「ぼくが冒険家という肩書きに違和感を抱く理由」を、本文全体から読み取つて説明しなさい。

二 次の1～4、ア～クの文中の——を漢字に直しなさい。  
また、ア～クの熟語の成り立ちは1～4のどれと同じか、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 昼と夜でカンタンカンタンの差がはげしい。
- 2 市役所にギンムギンムする。
- 3 テツボウやすべり台で遊ぶ。
- 4 先生は三月でタイシヨクタイシヨクなさる。

- ア 衣類をシユウノウシユウノウする。
- イ 野山をシユウオウシユウオウにかけ回る。
- ウ バスのゴウシヤロゴウシヤロは後ろです。
- エ ゼンリヨウゼンリヨウな市民を守る。
- オ 実験でカセツカセツを証明する。
- カ 記念碑のジヨマクジヨマク式を行う。
- キ カンマツカンマツのさくいんを見る。
- ク ナンイ度ナンイ度の高い技技に取り組む。

「わたし」は戦争中に大伯父のいるザンクトゲオルク僧院に来てすごしています。そこには大伯父の世話をしていた「叔母さま」がいました。

叔母さまとのこの親しい交わりは、しずかな、ほとんど無言のものであった。おだやかな、いつのまにか効果が現れてくるという仕方、叔母さま自身にはそんな意図もないままに、わたしは導かれていった。ある日、わたしは庭をぶらぶら歩きまわっていた。カーネーションの花壇に一輪、初めての花が咲いていた。新しく植えた、当時としてはまだめずらしい品種で、白にまっ赤な細いふちどりのある花だった。一目見るなりほしくなって、わたしはその花を摘んでながめていたが、しばらくするともう飽きて、べつのことに気が移り、捨ててしまった。夕方、家に帰ってみると、そのわたしが捨てて忘れてしまっていたカーネーションが背の高いガラスのコップにさしてあった。花びらはしおれてくしゃくしゃになり、枯れた茎から頭をたれている。わたしははっとした。①教えたとされている思いがした。翌朝、見ると、カーネーションはびんと立ち、きつきたばかりのようにみずみずしくコップのなかで背を伸ばしていた。叔母さまの教えは、②そういうふうにしてわたしに授けられていった。

ある日、叔母さまの人がらをもうひとつのすばらしい輝きのもとに見せてくれた、ちよつとした事件がおきた。ザンクトゲオルクに、カランという名前の年とつた男がいた。ポーランドかロシアからやってきて農場を手に入れ、③それを飲んだくれて食いつぶし、つれあいを三人つぎつぎに亡くした男で、老年を救貧院にはいつてすごしていた。カランは陰気な顔つきをしていた。ひげは脂でべとべとになった二本の黒い鎌のようで、厚ぼつたいくちびるの両側から喉までたれていた。まんなかで分かれた頭の毛は歳ににあわず黒々としていて、女の髪のように長く、汚れてごわごわになって大きな黄色い顔をとりにまいていた。④わたしはち子どもはカランを恐れていた。小さな子どもがいうことをきかないと、大人は「ほら、カランがくるよ」とおどしたものだ。それにもかかわらず、カランはふしぎな魅力をもっていた。たぶん、歌がうまかったのがその最大の理由だろう。ときどき、わたしは救貧院からそう遠くない藪のなかにしゃがんで、カランが、低い、いい声で、わたしの知らない国の哀調をおびた歌やげいし歌をうたうのに、じつと聞きいった。みんなはカランをきらった。遠くからカランがやってくるのが見えると戸を閉ざした。⑤犬のくさりをはずすものさえた。学校で子どもたちは、カランは猫や蛇を食べるだの、手あたりしだいなんでも盗むだの、三人のつれあいだつて毒殺したんだ、などとうわさしあっていた。

ある午後、わたしはひとりで僧院にいた。叔母さまは庭仕事をしていて。そこへカランがやってきた。気づくのがおそく、ドアに鍵をかけるまはもうなかった。カランはすつとはいって来た。大きながつしりした体をしているのに、歩き方は用心ぶかくしなやかなけもののように音がしなかった。ひとつもいわずにわたしのそばをA、大伯父さまの書齋に進んでいった。わたしは戸口にB、て、いった。

「大伯父さまはおるすよ。なんの用？」  
カランはわたしをちよつとC、て、部屋にはいつていった。わたしはときどきしながら、じつと見ていた。カランは夢遊病者のように部屋のなかをうろうろとさまよつたあげく、大伯父さまがいつもお金を入れてある鍵のかかってない小箱がはいった戸棚のまえに立った。わたしはどうすることもできないまま、カランの黄色く汚れた手がけもの爪のようにお金にのびるのをただ見つめていた。⑥あれよあれよと思うまに、お札が一枚、幅の広い袖のなかにかくれた。まるでだれにも見つからず、事がおわつたかのように、カランは平気な顔でくるりとむきをかえて部屋を出た。玄関のところで、「夕方、おれんとこへこないか。歌をうたつてやるぞ」と、わたしにいった。

餌がまかれ、うまくつばまれるかに見えた。が、⑦カランの思惑はずれた。ちよつとそのとき、叔母さまがやってきたのだ。カランは大きな袖が床石を打つほどふかぶかとおじぎをして、ふーつとためいきをついた。それから片手をひらいてさしだし、もの乞いのきまり文句をもぐもぐといった。わたしはI、。けれども叔母さまはわざとわたしを無視した。カランの汚い手をやさしくにぎって、いったのだ。

「いらつしやい。ちよつとコーヒーをいれたところなの。いっしょに飲みましよう。」

⑧カランはちよつと身をよじつたが、さつさと台所へいつて、テーブルについた。やつこのことで、わたしは叔母さまとふたりきりになった。

「叔母さま、わたしはII、。お金をとつたの。あの小箱から、大金を盗んだのよ。」

不可解なことに、叔母さまはわたしが二度、三度くりかえしささやいても知らんぶりだった。そして、不潔なカランをコーヒーとパンで最大級にもてなした。たのしくおしゃべりしながら、叔母さまはなにげなくたずねた。

「カラン、あなた、お金があるんじゃないの？」

老人はうなずいた。が、大急ぎでいった。

「いやいや、なんでもありませんよ、いるもんは。」

「お金はなにに使うの、カラン？」

「タバコ、おくさん、タバコだよ。」

「そう。じゃあ、このお金を。これで、あなた、きざみタバコが一箱買えるでしょ。」

老人は、叔母さまがまたパンをとり立つと、そのお金に手をだしてポケットにいた。そして最後にテーブルのうえのパンくずをあつめ、ピチャピチャ音をたてて指をなめた。⑨わたしは嫌悪の気持ちをどうすることもできず、ちよつとはなれたところからながめていた。

カランは立ちあがり、また袖が床を打つほどのおじぎをした。深く身をかがめたまま、もぞもぞといった。

「おれ、おくさんのために、なんか仕事をしたいでやすが。」

「いいわ。教会にある大きなキョウチクトウの植木鉢をみんな狩りの間へ運んでちょうだい。」

叔母さまは道を教えておいてから、どの部屋もどの戸棚も鍵のかかっていない建物にカランをひとりのこし、わたしをつれて庭へ出た。

「叔母さまつたら、わたしはIII、。」

「カランをひとりにしちやだめよ。またお金をとるわ。きつとよ。」

叔母さまはわらつた。

「いいえ、そんなこと、あの年寄りのカランはしませんよ。」

わたしは⑩むとんちやくな叔母さまが理解できなかった。そして、大さわぎがもちあがるにちがいない、盗みの罰がくだされておわりになる大さわぎがもちあがるにちがいない、と思った。しばらくすると、カランが汗びつしよりでやってきて、おじぎをした。

「おくさん、おわりましたです。」

「神さまのごほうびがありますわ。」

叔母さまはそういつて、心をこめてといえるほどの握手をしてカランを帰した。カランが足音もたてず大きな図体を右に左にゆすりながら庭をとおつて帰つてゆくのを、わたしたちは見送つた。わたしは嫌悪の情も⑪あらわに、叔母さまはこにこしながら、その笑顔はやがて声をともしない、明るい、あたたかい、心の底からの笑いになっていった。

「なんておもしろい人なんでしょう」と、叔母さまはいった。「みんな、わからないだけなのよ。」

わたしはIV、。わたしは「そう。」叔母さまはふーつと息をつきながらいった。「でも、もしお金がなく

て、だれもくれようとしなかったら、そしてどうしたらいいかわからなかったら、どこかへとりにいくしかないんじゃないかしら？」

そのあとすぐ台所にはいつてみると、テーブルの上にあのお札がおいてあった。わたしは目をみはつた。⑫どうしてカランはかえしたのかしら？ それに、どうして、気づかれないようにもとの小箱へそつともどしておかないで、はつきりわかるようにここへおいていつたのかしら、自由に入りにできたのには？



